

人工物の現出——道具の非道具的知覚をめぐって

松山 聖央 (武庫川女子大学)

本発表の目的は、環境美学の立場から、本来道具的に使用される人工物を、非道具的に知覚する経験の特質を明らかにすることである。

導入では、環境美学におけるこれまでの人工物の扱いの問題点を整理する。近年の研究においては、初期の展開でおもな対象となってきた自然のみならず、私たちの実際の生活環境におけるさまざまな美的経験を主題化する試みや、現代の複雑な環境を自然と人工のハイブリッド、あるいは連続体としてとらえ直そうという見方も提示されている。しかし、アリストテレス的な「自然／人工」の境界設定がいまや意義を失っているとしても、両者の文化的差異、そしておそらくは美的差異も無効化されたわけではないとすれば、あえて人工物に焦点を当て、その美的な特異性・固有性を明らかにすることも必要である。

ここでは、人工物の美的経験を記述する手がかりとして、意図主義的な人工物の定義を参照する。存在論的には、人工物は設計者／製作者の意図にもとづいて現にあるようにつくられた事物であると説明される。この説明は、人工物は人間の活動という目的に沿った機能を与えられているため、私たちは無関心な態度でそれを経験することが難しいという美学的な知覚論の側の見方にも呼応する。本発表では、意図主義的な人工物の定義への複数の反証も踏まえつつ、意図あるいは機能によって枠づけられた道具的連関が瓦解する契機として、「故障／失敗」「親密化」「再創造」という三つの日常的な経験について考察する。

「故障／失敗」とは、人工物の不具合や使用者の操作ミスによって、想定された機能が発揮されない場合である。「親密化」は、長く使用することなどによって人工物に愛着を抱くような状況である。そして「再創造」は、手芸のお直しやDIYなど、通常は完成された人工物を与えられるだけの使用者が、創造的に人工物に関与する経験である。これら三つの契機に関する事例の記述をつうじて、普段は道具的連関に埋没している人工物が、知覚対象として現出する様相を詳かにすることを目指す。ただし付言すれば、本発表のねらいは、従来の(環境)美学が想定してきた美的経験の対象の列の最後尾に道具的人工物を加えることにあるのではなく、人工物の知覚の分析をつうじて、芸術や自然を範例とした議論では導出できない知覚モデルを提示し、むしろ美的経験とはいかなるものであるかを問い直すことである。